

# 日本刀鑑賞の手引

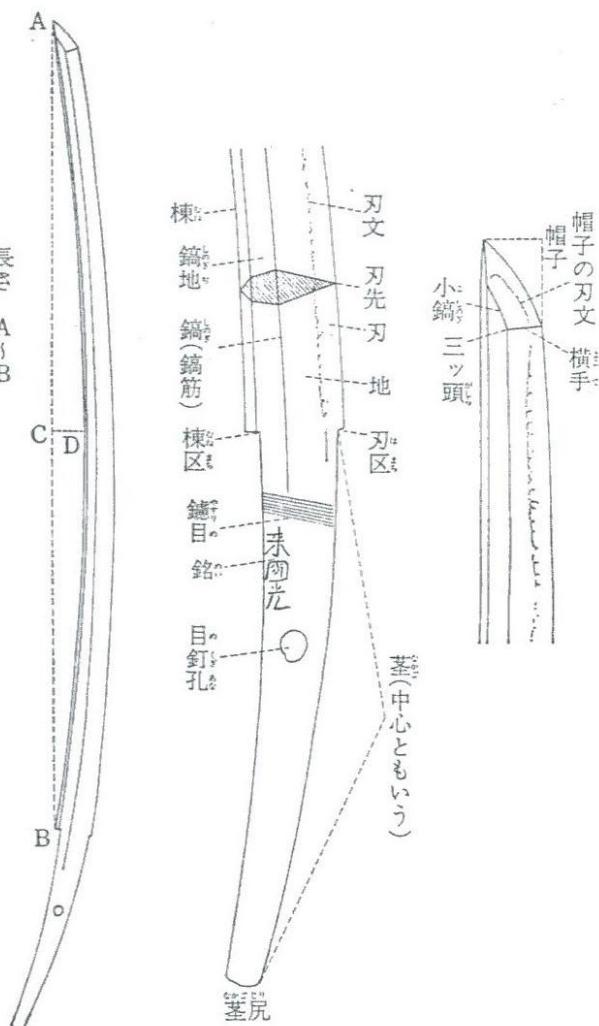
日本刀は世界無比の鉄の芸術品と言われており、私たちの祖先は刀や甲冑のような武器・武具にも美を求めて、大切に扱ってきました。洗練された姿、鍛えられた地鉄、美しい刃文などが時代や流派の特色をあらわしているのも興味深いことです。

日本刀には、太刀、刀、脇指、短刀のほか、剣、薙刀、槍などの種類があります。

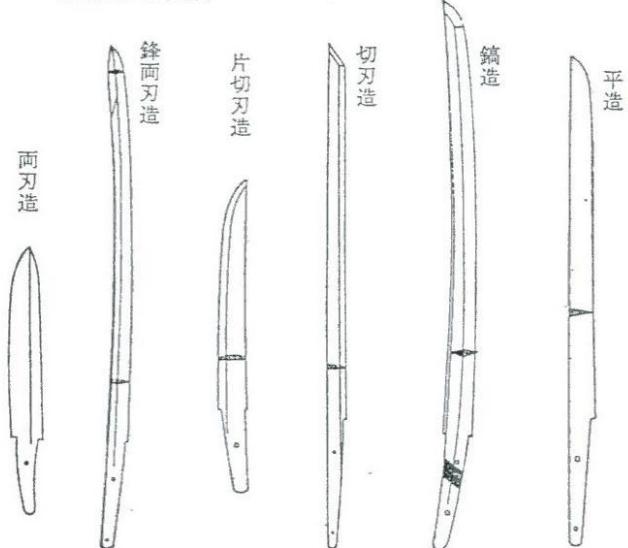
**太刀** 皆さんのが美術館・博物館でご覧になるとき、刃を下にして飾ってあるのが太刀で、平安時代（12世紀）末期から室町時代初期まで、腰に佩いて（吊して）用いたものです。反りが高く、長さはふつう65～70cmぐらいあります。

・**刀** 太刀に代わって室町時代中期（15世紀後半）から江戸時代末期（19世紀中頃）まで使用され、長さは60.6cm（二尺）以上ありますが、太刀よりはやや短いものです。太刀とは逆に、刃を上にして腰に指します。もとは太刀であっても磨り上げて短くなると刀と呼び、一般の刀と同様に刃を上にして刀掛けに置きます。新刀（慶長=1596～1614年以降のもの）の肥前刀、あるいは幕末の新々刀には太刀の様式に作られたものがあります。

**脇指** 一尺（30.3cm）以上、二尺以下のもので、刀と同じ



## 造込みの種別



く腰に指します。小脇指と呼ばれる一尺二、三寸（36cm～40cm）のものもあります。桃山・江戸時代には大小といつて刀の指添にし、揃えて一組にして用いられました。

**短刀** 長さが一尺（30.3cm）以内のもので、腰刀とも呼ばれます。古くは「かたな」というと短刀のことでした。  
**造込み** 平造り、鎔造り、切刃造り、両刃造りなど、いろいろ種類があります。

**鍛え** 日本刀は「折れず、曲がらず」という条件を満たすために、炭素量の少ない心鉄（軟らかい鉄）を、炭素量の多い皮鉄（硬い鉄）で包んで鍛錬するのです。皮鉄は玉鋼を用い、15回ぐらい折返して鍛錬されます。

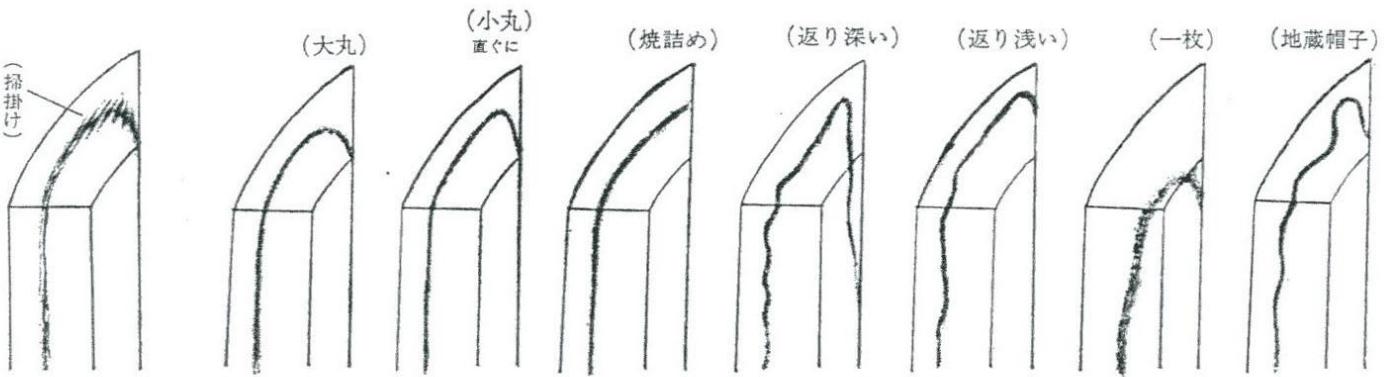
**鍛え肌**には、板目、杢目、柾目、梨子地、綾杉などがあり、さらに、地沸、地景、映りというような様々な変化があらわれ、流派や刀工の個性がうかがわれます。

**沸と匂** 焼入れを行うと、刃の部分と地の部分に硬度の差によって刃文が生じますが、刃文と地の境目に沸や匂が表われます。沸は粒子の粗い部分で、肉眼でとらえることができますが、匂は顕微鏡で見てやっとわかるほど粒子が細かいものであり、例えば、夜空に輝く星のようにきらきらと光って見えるものが沸であり、天の川のようにぼうっと霞んで見えるのが匂であると言えましょう。

冶金学者の俵国一博士（1872～1958）は、焼入れによってできる最も硬い組織（マルテンサイト）と、中位に硬い組織（トルースタイト）が混在するために、研磨の結果、浮き上がって見えるのが沸や匂であることを科学的に証明されました。

**地刃の働き** 「働き」とは、動きや変化のあることを言い、その形状によって、足・逆足・葉・砂流し・掃掛け・打のけ・金筋などの言葉で表現します。

沸がつながって細い線となり、刃中にきらりと光って見



えるのを金筋、やや太く長いものを稻妻と呼び、同様のものが地の中にある場合を地景、沸が一部分にかたまって飛燒となっていないのを湯走りと称します。

沸は刃の部分だけでなく、地にもつき、これを地沸と言います。沸の多い作風を「沸出来」と称し、主として鎌倉初期の作刀や相州物の系統に見られるものです。「匂出来」の作風は、鎌倉中期以後の備前物や南北朝時代の備中青江物などに代表されます。

**刃文** 日本刀の美といえば、姿や鍛え肌とともに刃文の美しさを挙げなければなりません。刃文とは刃を丈夫にするための焼入れの技術によって生ずる模様のことです。燒刃土という粘土性のものを荒仕上げした刀身に塗り、へらを用いて刃の部分だけ土を薄く落とすのですが、落し方で直刃になったり、乱刃になったり、刃文の形がきります。これを土取と言い、土取の土が乾いたところで炉に入れ、刀身の焼加減を見て水槽に入れるのです。これを焼入れと言い、最も技量を要する大切なものと言われています。

刃文の図で示したように、直刃にも細直刃（匂のしまったもの）や広直刃などがあり、乱刃には、小乱、丁子、重花丁子、蛙子丁子、互の目、片(肩)落ち互の目、三本杉、湾れ、濤瀬、皆焼、簾刃など、様々なものがあります。

**帽子 鋒** (切先) の部分を言い、これの大小の形と、そこに焼かれた刃文とは個々の刀工の特色や各時代の特色をよく表わしているので、大事な見どころの一つとなっています。帽子の焼刃の形には、大丸、小丸、乱れ込み、焼詰め、地蔵、火焰など種々の名称があります。

**茎の鍔目** 茎(中心とも書く)はたいてい鍔目を入れて仕上げてあり、これにより系統や時代を知ることができます。

**切 (横ともいう)** 最も一般的なもの。

**勝手下り** 勝手は右手のことで、右下りの鍔をいい、横鍔について多い。

**筋違** 勝手下りより角度の急なもの。左下りは逆筋違。

**大筋違** 古刀では青江一門、左一門の特色である。

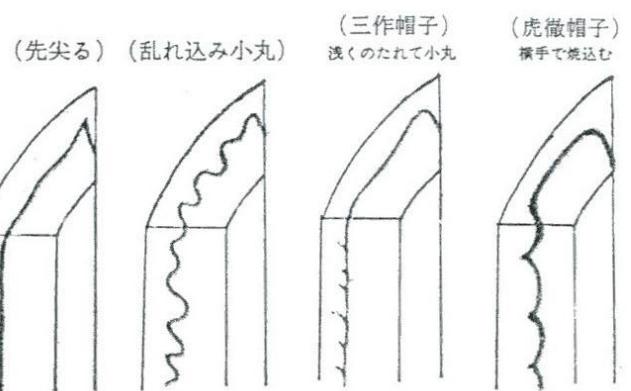
**鷹羽(羊歯)・逆鷹羽・片筋違** 大和系に多い。

**檜垣** 大和、美濃、薩摩の波平一門等。

**化粧鍔** 新刀に限る。

**鍔鋤 (鍔目)** 上古刀。

**刀身彫刻** 刀身に彫刻を施すことは、すでに平安時代から行われ、実用からのもの、信仰によるもの、装飾的なものがあり、時代の流行や系統によって特色が見られます。



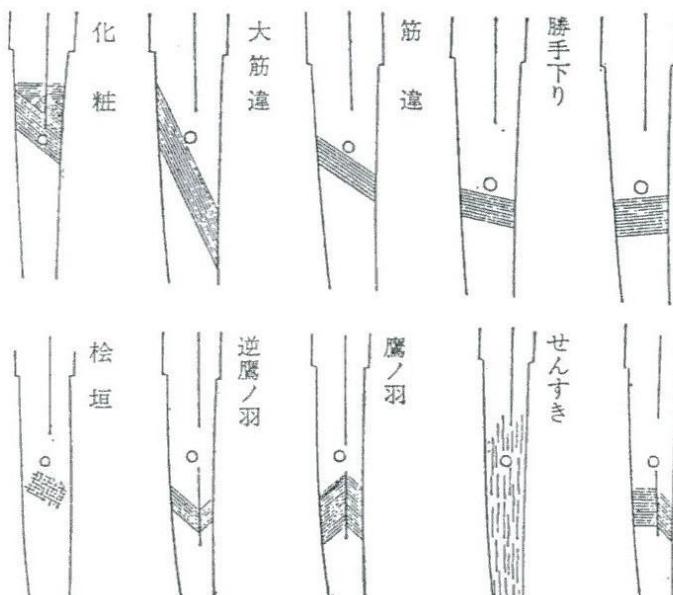
樋の留め方には、角留、丸留、搔流し、搔通などの種別があります。

古刀では樋のほかに信仰を示すものが多く、梵字、劍、不動明王、俱利迦羅、三鉢劍、護摩箸や、八幡大菩薩、南無妙法蓮華經、天照皇大神、三十番神などの文字があります。新刀になると、装飾性が強くなり、鶴亀、上下竜、松竹梅、蓬萊山、などが彫られています。

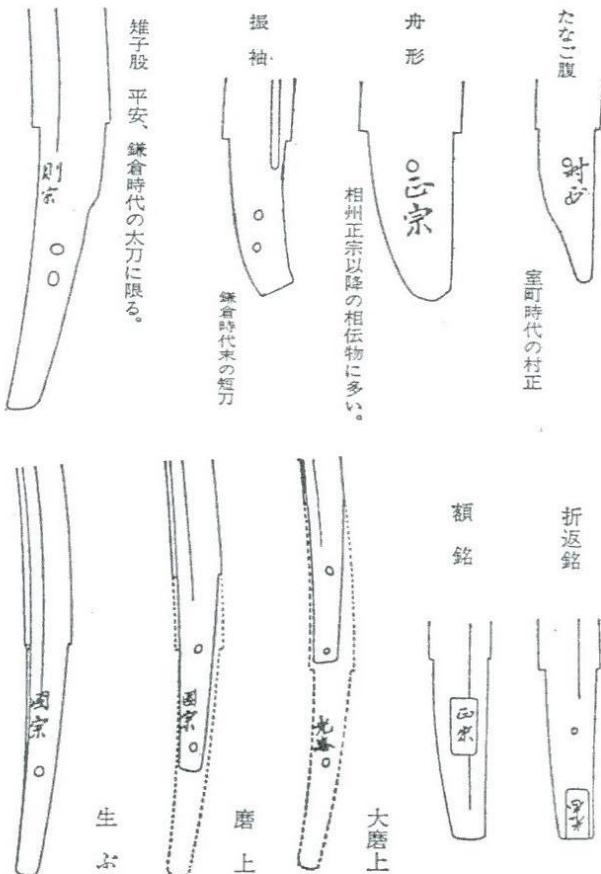
### 日本刀の時代による特徴

- 上古** この時代の刀剣の資料としては、古墳から発掘されるものと、奈良時代の正倉院御物の刀剣類があります。これは反りのない直刀であって、平造と切刃造がほとんどであります。
- 平安末期～鎌倉初期** このころから、いま私たちが普通に見る太刀、すなわち反りのある鎬造のものがあらわれました。元幅が広く先幅がせまく、腰反り・踏張りが強いものです。  
著名刀工 三条宗近・五条兼永(京)、安綱(伯耆)、友成・正恒(古備前)、一文字則宗・助宗(備前)、貞次・康次(備中)、三池典太光世(筑後)、行平(豊後)、波平行安(薩摩)
- 鎌倉中期** 鎌倉武士全盛の時代で、重ね厚く、平肉豊かに、元幅と先幅の差が少なく、いかにも豪壮な太刀姿となり、刃文は華麗な丁子乱が流行しました。また、短刀の製作も多くなります。  
著名刀工 栗田口国吉・吉光(山城)、国行・二字国俊・来国俊(山城の来一門)、中期から末期へかけて、千手院・保昌・尻懸・手搔・當麻(大和五派)、国宗・助真・新藤国光(相模)、一文字吉房・助房、長船光忠・長光、畠田守家・真守、片山一文字則房(以上備前)、助次・吉次(備中)

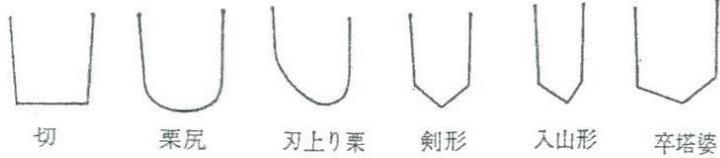
## 鍔目の種別



## 茎の形



## 茎尻の種別



4. 鎌倉末期 更に豪壮雄大なものとなり、身幅が広く、元幅と先幅の差の少ない、切先の延びたものとなります。刃文は互の目あるいは湾れと称するものが始めます。時代が下がるにつれて、匂出来から沸出来のものへと移ります。五郎入道正宗は沸出来の作風を完成したと言われております。

著名刀工 来国光・来国次(山城)、当麻国行・保昌貞吉・手搔包永・尻懸則長(大和一中期～末期)、行光・正宗・貞宗(相模)、則重(越中)、実阿・西蓮(筑前)、延寿国村・国資・国時(肥後)

5. 南北朝時代 三尺に余る長大な太刀が作られ、短刀も大振な平造のものとなります。太刀は後世に多くは磨上げられて短くなり、刀に仕立てかえられました。

著名刀工 信国・長谷部国重(京)、兼氏(美濃)、兼光・長義(備前)、次直・次吉(備中)、左文字(筑前)

6. 室町前期 鎌倉初期の様式にならって復古刀の作風を示し、各種の短刀や脇指が作されました。

著名刀工 信国(京)、盛光・康光(備前)

7. 室町後期 室町時代になると戦闘様式は一騎駆けから徒步の集団戦に移り、刃を上にして腰帯に指す打刀が多くなります。応仁・文明の乱以後、各地に戦乱が起り、粗製品の数打物が出まわりました。特に注文によって念入りに鍛えたものを注文打と呼んで区別しています。備前(岡山県)と美濃(岐阜県)が二大生産地です。

著名刀工 平安城長吉(京)、村正(伊勢)、兼定・兼元(美濃)、祐定・勝光・清光(備前)

8. 桃山時代 刀剣史上、慶長(1596～1614)時代以前のものを古刀と称し、以後のものを新刀(新刃・新身)と呼びます。刀鍛冶は京、江戸をはじめ、新勢力の諸大名の城下町を中心として集まり、また交通の発達は鉄資材の交流を促し、また外国製の鉄すなわち南蛮鉄も使用されるようになりました。

著名刀工 埋忠明寿・堀川国広(京)、南紀重国、越前康継・繁慶(江戸)、肥前忠吉

9. 江戸時代(寛永・正保から文化以前) 天下泰平となり、刃文にも斬新華麗なものがあらわれました。

著名刀工 長曾祢虎(扇)徹(江戸)、和泉守国貞・井上真改・越前守助広・近江守助直・一竿子忠綱(大坂)、仙台国包・主水正清(薩摩)

10. 幕末時代 文政以後のものを新々刀または復古新刀と称します。水心子正秀(羽前山形→江戸)や南海太郎朝尊(土佐)は復古刀を唱え、水心子の門に大慶直胤がいます。源清磨(信州→江戸)も相州物・美濃志津の作風の復古を志し、その技量は高く評価されました。

11. 明治以後 明治維新となり廃刀令が出て刀工は職を失いましたが、1906年に至って、月山貞一・宮本包則が帝室技芸員に任命され、鍛刀の技術は保護されました。

今日に於ても作刀界は隆昌を続けています。

東京都渋谷区代々木4丁目25番10号(〒151)

財団法人 日本美術刀剣保存協会・刀剣博物館

電話 03-379-1386~9

## 刃文の種類

(平安末・鎌倉初)

直刃調小乱

互の目

直刃小丁子

角張る互の目

直刃調小互の目

肩落互の目

(鎌倉中期)

重花丁子

のた湾

大房丁子

沸の強い湾れ

(室町前期)

蛙子丁子

皆焼

(室町前期)

逆丁子

腰開き互の目に丁子乱

(鎌倉末期)

(室町後期)

腰開き複式互の目

三本杉

兼房乱れ  
(互の目の変形)

はこ箱

すだれ簾

数珠刃

濤瀾刃

## (地刃の働き)

槍達刃

打のけ

一重刃

逆足

葉

小足

長い足

砂流し

金筋

(江戸中期)

(各時代)

匂のしまった直刃

匂の深い直刃



拳形丁子